

ガルシン「信号」を読む英語の授業  
—どのように設計され、行われ、総括されたか—

**Reading Class of the English Text of Garshin's *The Signal***  
**— How the Lesson Was Designed, Conducted and Reviewed —**

山田昇司 (朝日大学)

syouzi@alice.asahi-u.ac.jp

目次

1. こんな作品があったのか！ — 自己犠牲、人間の善へのガルシンの信頼
2. 露土戦争から始まる物語 — 「だがその血染めの旗は地面へ落ちはしなかった。」
3. 削られたバシーリの言葉 — 「おれたちの血をたんと召し上がったってわけさ」
4. 英文テキスト、その選択基準 — 作業性、語彙、単文、描写性
5. 授業設計はプリント形態と枚数から — 自学自習も可能な All in One
6. 繰り返される強弱のリズム — 学生の反応を見て記号修正
7. 視写プリントは何のため？ — 「暗記」から「語順認識」への意識変革
8. 和訳が鍛える思考力、磨かれる日本語 — 「足し算訳」のヒントはどう出すか
9. 日本語を文法的に理解する困難さ — 「センセンマル」の反復は見えるか？
10. 学生レポートから読む主題 — 新たなバシーリ像をとらえた形象読み
11. まとめにかえて — 「アクティブ・ラーニング」と「グローバル人材」

**NOTES**

**REFERENCES**

## 1. こんな作品があったのか！ — 自己犠牲、人間の善へのガルシンの信頼

私がガルシン「信号」という教材に出会ったのは、いまからちょうど1年ほど前(2015年3月)になる。そのときにすでに太宰治「走れメロス」の英訳を次年度の教材に使うことを決めていたのだが、彼が影響を受けたという19世紀ロシアの作家であるプーシキン、チェホフ、ガルシンなどの作品をいくつか拾い読むうちに「信号」に出会ったのだ。

こんな作品があったのか！ 私は一読して心を奪われた。自己犠牲、人間の善に対するガルシンの信頼 — その熱い思いがこの短編に込められている。生と死の狭間で人間はどう行動するのか、人間とは何か？ 迫り来る列車に向かって旗を振るセミョーンの姿、それは刑場に向かって走るメロスや「名のるか沈黙か」で苦悶するバルジャンの姿とも重なってくる。こんな作品に次々と出会うとは私はなんと幸運なのだろうか。またこの教材を見つけたすぐ後に、また幸運にも、大西(1970)の中に彼がこの作品「信号」を中学校の国語授業で扱った記録を見つけることができた。これは作品の深い読みとりにきつと役立つにちがいないと思った。

この感動を私の英語授業でも学生と共有したい、私はそう思ってすぐに大学図書館検索をかけた。数日してその英訳本が届けられた。かなり古い本だったので慎重に頁を開いてコピーをとった。最初はそれをOCRで読み取ることを考えたが、もしかするとネット上にも出ているのではないかと思って書名で検索をかけてみるとこの本の画像がそのまま出ているサイトが見つかった。

書名 : *The signal and other stories* / W.M.Garshin ; translated from the Russian by Roland Smith, Duchworth 1912

<https://archive.org/details/signalotherstori00gars>

しかし残念なことに文字データをそこから直接に取ることはできなかった。(註1)ところが、この検索作業の過程で偶然にも文字データをとれるサイトがふたつ見つかった。また、そのうちひとつは活字になって出版されていることも分かった。つまり、「信号」の英訳は3種類あるということだ。また日本語訳の方も調べてみると、最初に入手したもの他に2種類あることがわかった。[この原稿を執筆中にもう1冊みつかった。]

[https://en.wikisource.org/wiki/Best\\_Russian\\_Short\\_Stories/The\\_Signal](https://en.wikisource.org/wiki/Best_Russian_Short_Stories/The_Signal)

書名 : *Best Russian Short Stories* / Compiled and Edited by Thomas Seltzer, Createspace 2014  
Translated by Steve Smithers 1917

[https://en.wikisource.org/wiki/Short\\_Story\\_Classics\\_\(Foreign\)/The\\_Signal](https://en.wikisource.org/wiki/Short_Story_Classics_(Foreign)/The_Signal)

Translated by Lizzie B. Gorin 1907

じんざい  
神西清 (訳) (1937) 『あかい花他4編』岩波文庫

小沼文彦 (訳) (1968) 『赤い花・信号』旺文社文庫

とおる  
中村融 (訳) (1990) 『ガルシン短編集』福武文庫

これで私はその時点で集めうる全ての資料を揃えることができたのだが、私は上記の資

料を読み比べていて不思議なことに気づいた。小沼訳は、神西訳・中村訳とは1カ所、異なるところがある。神西訳・中村訳で訳出してある数行が小沼訳にはすっぽり欠落しているのだ。また、その欠落部分は3つの英訳にも見当たらない。これはどういうことなのか。私は以前に米国の黒人詩人ラングストン・ヒューズの有名な詩 Let America Be America Again に2種類の英文があってその原因を調べたことを思い出していた。ロシア語原文はふたつあるのだろうか。それとも…。

## 2. 露土戦争から始まる物語 — 「だがその血染めの旗は地面に落ちはしなかった。」

前節の最後に指摘した脱落箇所の問題について論じる前に、まずこの物語の概略を説明しておきたい。物語はセミヨーンが鉄道の線路番だったとの記述から始まる。そしてその後には彼がその職にありついた経緯が書かれている。セミヨーンは露土戦争に一兵卒として参加したのだが、戦線では将校たちに危険を冒してサモワール\*と食事を運んだことで気に入られていた。戦地から戻ったセミヨーンは自分が体を壊しただけでなく、年寄りの父はなくなり子どもは病気で死んでいた。妻は女中奉公に出て自分は無職で渡り鳥生活をしていたときに、ある駅で偶然に以前の連隊の将校と出会う。駅長をしていたその元将校はセミヨーンに線路番の仕事を与える。そこでセミヨーンは同じ線路番の仕事をしていたバシーリと出会う。彼とバシーリはお互いの人生に対する考え方は対照的だったが、ほどなく仲良くなる。 \*ロシアのやかん

セミヨーン「おれもずいぶんと苦労してきたものさ。それにおい先ももう長くはねえんだ。つまりおれは、仕合わせを授からなかったのさ。いったん神様がある運勢をお授けなすった以上は、もうそれっきり動かしようもないんだ。」

バシーリ「うんにゃ、おめえやおれの一生を台なしにしやがるのは、運勢なんてもんじゃあねえ。人間どもなんだ。まったくこの世の中に、人間ほど強欲で性の悪い獣はねえよ。」(神西訳)

ある春のことバシーリは無許可で畑にキャベツを植えるが、そのことで線路監督に罰金を科される。その非情な処置に怒りを覚えたバシーリは後日、線路の検分に来た管区課長に訴え出るのが、線路監督から前もって危険人物として密告されていたために、逆に管区課長から怒鳴られてしまう。そのときつい口答えをしてしまったバシーリは血が出るほど殴られる。それからバシーリはモスクワの本省に直訴すると言い残し、家に妻をおいて出て行ってしまうのである。セミヨーンはそれを引き留めようと彼を説得する。

セミヨーン「やめにしろよ、ステパーニッチ。おらあ悪いこたあ言わねえ、そっとしとくが身のためだぜ。」

バシーリ「何が身のためだ！ そっとしとくが身のためだぐれえ、おれだって百も承知だ。お前は運勢のことを言ってたっけが、今になってみりやなるほど思い当たらあ。みすみす身のためにやならないと知りながら、正義のためにゃ、兄弟、やっぱり歩もひけねえものなあ。」(神西訳)

それからしばらくして、セミヨーンは森に横笛を作る枝を切りに行った。その仕事を終えて帰ろうとしたとき、彼は受け持ち区域では修理工事が行われていないのに鉄と鉄を打ち合わせる音を聞く。怪訝に思って土手を登るとそこで線路を外しているバシーリを見つめる。レールを戻すように言うセミヨーンを振り切ってバシーリは逃げ去る。セミヨーンは道具を取りに一度は小屋に戻ろうとするが、間に合わぬと判断し、ついには自分の腕にナイフを切りつけ血染めの旗をつくる。迫り来る列車に旗を振るセミヨーン。しかしやがて彼は意識をなくし旗を落とす。…

結末までは書かなかったが、物語の大筋は理解してもらえたのではないかと思う。参考までに追記すると、ガルシンは 1877 年に露土戦争に志願して従軍している。その体験に基づいて「四日間」(1877)や「一兵卒イバーノフの回想より」(1883)などの作品を書いている。この「信号」という作品は 1887 年、彼の死の前年に書かれている。

さてそこで、いま記した全体像を頭に入れて前節で指摘した「脱落箇所」の問題に入る。

### 3. 削られたバシーリの言葉 — 「おれたちの血をたんと召し上がったってわけさ」

その脱落箇所というのは、特別仕立ての客車に乗ってやってきた局長がプラットホームに降り立つ場面で、バシーリがその局長の姿を口汚く罵るところである。前節で紹介したあらすじの中で言うと、バシーリが春に無許可で畑にキャベツを植えて罰金を払わされた後の出来事だと推測される。以下にまず、バシーリがキャベツの件で罰金を払わされた時のことをセミヨーンに語った言葉を示す。彼の憤怒がいかに大きかったかがよくわかる。

この春キャベツを植えたんだがね、するてえとたちまち監督のやつが飛んできて「こりゃ何ちゆうことだ？」とこうなんだ、「なぜ、願いでんのか？なぜ許可を受けんか？根こそぎそっくり堀っ返しちまえ。」やっこさん酔っ払ってたんだ。これが素面のときだったら、見て見ぬふりですましたに違いねえのに、その時は妙にえこじになりやがってね……「3 ルーブリの罰金だ！」と来た。……すんでのことで、あいつ死ぬほどぶちのめしてくれとこだったよ。(神西訳)

このときバシーリが線路監督に対して感じた怒りは、その後に同じ官吏である局長を駅で見たときにも尾を引いているはずである。以下に示す該当箇所を見ていただきたいが、バシーリの怒りがまだ納まっていないのに、ただ「そっくり返っていやがった」という記述だけではどうも不十分な気がするし、かつ最後の台詞である「当地から出て行く」という決意にもうまく繋がらない。ところが、神西訳や中村訳にあるような太字部分(＝バシーリの局長に対する辛辣な悪罵)が入ると「出て行くんだ」にすんなりつながってくる。

神西清 (訳)

やっこさん、別仕立ての客車に納まってたが、やおらプラットフォームに降りたって、そっくり返っていやがった。下っ腹によ、**金鎖なんかちらつかせやがってよ、ほっぺたなんぞ、まるではちきれそうに、いい色してやんのさ。……おれたちの血をたんと召し上がったってわけさ。……えい、くそ、力とご威光がありさえすりゃ！……まあさ、おれがここにいるのも長いことじゃないぜ。出て行くんだ、足の向く方へな。**

小沼文彦（訳）

特別仕立ての客車に乗ってきやがってさ。プラットフォームにおりてきて、立ってやがるんだ……。いやまあ、おれあ長いことここに残っちゃいないよ。足の向いたほうへ、去っちまうんだ。

中村融（訳）

大将、特別仕立ての客車におさまっていた付けが——プラットフォームに降りてくると、こう突っ立ちやがってな、腹のあたりに金ぐさりなんぞぶらつかせやがって、ほっぺたときたらはちきれそうに赤くてよ……つまり、おれたちの血をしこたま飲みやがったんだ。畜生、力と権力さえありやな！……まあ、俺も、もうここにや、ながくはいたくねえよ、どこへでも気の向いた方へおさらばだ。

Smith 訳 1912

He had a separate carriage, came out and stood on the platform, stood....Yes, I shall not stay long; I shall go, anywhere, follow my nose.

Smithers 訳 1917

He had a separate coach. He came out and stood on the platform....I shall not stay here long; I shall go somewhere, anywhere, follow my nose.

Gorin 訳 1907

He occupied a whole privatecar by himself—on the station he alighted and stood on the platform, looking—no, I will not stay long; I shall go where my eyes will lead me.

繰り返しになるが、太字の部分が小沼訳および3つの英訳に欠けているところである。神西訳と中村訳から判断すれば、ロシア語原文には太字部分があったと考えるのが自然だ。翻訳は翻訳者が何を原典に選んだかで当然、訳出したものは異なってくるので、上記の4人の訳者が脱落させたとはもちろん即断できないが、ロシア語原典からこの翻訳ができる過程のどこかでその部分を意図的に削除した翻訳者が介在していることは間違いない。

以下は私の想像であるが、その部分を削除した翻訳者は「この話は子どもにも読ませたいから荒々しい粗暴な言葉づかいのところは教育的配慮から削除した」と言い訳するかもしれない。しかし、その言葉がいくら酷くても、それが19世紀ロシアにおける腐敗した官吏に対する庶民（農民）の正当な怒りを表すものであるならば、そのまま残すのが真の意味で教育的ではなからうか。いや、ひょっとすると、その翻訳者は「教育的」という言葉を隠れ蓑にして「政治的」な判断で不都合な真実を消し去ったのかもしれない。[なお、ロシア語原典は次のURLにある。[http://az.lib.ru/g/garshin\\_w\\_m/text\\_0190.shtml](http://az.lib.ru/g/garshin_w_m/text_0190.shtml)（註2）]

#### 4. 英文テキスト、その選択基準 — 作業性、語彙、単文、描写性

さてここまでは教材発掘、内容検討について述べてきたが、本節では先述の3種類の英文からどうやって1つの英文を教材に選んだのかを記述する。まず最初に、文字データを直接に取れない最初の Smith 英訳を除外した。限られている時間の中での教材作成には作業効率の問題は無視できないのだ。

残ったのは Gorin 訳と Smithers 訳だったが、ざっと読んだ感じではどちらも単文の割合が多いように思えた。翻訳という性格上そうならざるを得ないのであろう。最終的には冒頭部と最後の部分を比較して Smithers 訳を採用した。ただ、部分的に Gorin 訳と入れ替えたところも数カ所ある。

冒頭部を比較してみると、太字で示したように Gorin 訳の方が語彙的には少し固い単語が用いられていると思われる。おそらく Smithers 訳(1917)は、Gorin 訳(1907)をふまえてより広い読者層に受け入れられるように平易な言葉を選択したのであろう。

#### Gorin 訳・冒頭部

Semen Ivanov **served** as trackman on the railroad. His watch-house was twelve versts (nearly eight miles) distant from one station and ten from the other. The year before a large **weaving** mill had been **established** about four versts away; and its tall chimneys looked black from behind the trees of the wood; and nearer than this, apart from the other watch-houses, there was no human **habitation**.

#### Smithers 訳・冒頭部

Semyon Ivanov **was** a track-walker. His hut was ten versts away from a railroad station in one direction and twelve versts away in the other. About four versts away there was a **cotton** mill that had **opened** the year before, and its tall chimney rose up darkly from behind the forest. The only **dwellings** around were the distant huts of the other track-walkers.

終結部を比較すると、まず最後の文の違いが目につく。前者が複文(強調構文)で、後者は単文である。どちらがそのときのバシーリの気持ちをより正確に表しているかだろうか。ずいぶん迷って甲乙つけ難かったが、結局は、英文構造がシンプルな Smithers 訳の方を選択した。

Gorin 訳	it was I who cut the rail	あっしなんです、レールを外したのは。
Smithers 訳	I tore up the rail.	あっしがレールを外したんです。

ただ、Smithers 訳にあった分詞構文的なところ(波線部分)は分かりづらいと考えると Gorin 訳と入れ替えた。[ただ、いま考えてみると、分詞構文的な方が文体的には締まって簡潔なので、そのときの緊迫した様子をより適切に描写していると言えるかもしれない。]

#### Gorin 訳・終結部

The people came rushing from the train; soon they gathered into a crowd; before them lay a man, unconscious, covered with blood; another man stood beside him with a bloody rag tied

to a stick.

Vasili surveyed the crowd and lowered his head.

Bind me," he said; "**it was I who cut the rail.**"

Smithers 訳・終結部

People jumped out of the carriages and collected in a crowd. They saw a man lying senseless on the footway, drenched in blood, and another man standing beside him with a blood-stained rag on a stick.

Vasily looked around at all. Then, lowering his head, he said: "Bind me. **I tore up a rail !**"

実際に用いた英訳

People jumped out of the carriages and soon gathered into a crowd. Before them lay a man, unconscious, drenched in blood, and another man stood beside him with a blood-stained rag on a stick.

Vasily looked around at all. Then, lowering his head, he said: "Bind me. I tore up a rail !"

終結部においてもうひとつ Smithers 訳の方がいいと感じた箇所がある。それは列車が止まる場面の表現である。機関士の動作の手順が書き込まれて目に見えるが如きの描写だ。

Gorin 訳・終結部

The engineer saw him and brought the engine to a stop.

Smithers 訳・終結部

The engineer saw it, shut the regulator, and reversed steam. The train came to a standstill.

このようにして3種類の英文からひとつを採用し、部分的には他のものを参考にしてそれに修正を加えたのだが、いま述べた終結部以外でも言葉を入れ替えたところがある。それは和訳では「猿柳で笛をつくること」となっている部分である。そこは Smithers 訳では *make a flute out of a kind of reed* となっていたが、私は *reed* という「葦」を思い浮かべて、そんな草のようなものでは笛の材料にはならないような気がした。そこで Gorin 訳を見てみると *make willow pipes* となっていた。*willow* ならば「柳」なので「木」のイメージがありこちらのほうがより適切だと考えた。実際に用いた英文では *make them out of a kind of willow* としてみた。

## 5. 授業設計はプリント形態と枚数から — 自学自習も可能な All in One

このようにして教材として使う英文は決まったのであるが、本節ではそれを用いてどのように授業設計したのかを述べてゆく。まず私はこの教材を後学期で完結するにはこの英文は長すぎると考えた。そこで英文読解は後半の四分の一として前半は日本語訳を読むことにした。(註3) そしてその日本語訳には小沼訳を採用した。先に指摘した脱落箇所の問題はあったが、挿絵が一枚入っていたからである。教材プリントには視覚的な要素が入っているとずいぶん感じがよくなる。文字情報ばかりだと学習者に心理的圧迫感を与える





- 5 読解(4)、リズムよみ・グループテスト(4)、視写(4)
- 6 読解(5)、リズムよみ・グループテスト(5)、視写(5)
- 7 読解(6)、リズムよみ・グループテスト(6)、視写(6)
- 8 読解(7)、リズムよみ・グループテスト(7)、視写(7)
- 9 読解(8)、リズムよみ・グループテスト(8)、視写(8)
- 10 読解(9)、物語全文(日本語)の読み聞かせ&輪読、まとめのレポート
- 11 英作プリント(1)
- 12 英作プリント(2)
- 13 英作プリント(3)
- 14 英作プリント(4)
- 15 総復習、授業アンケート、最終テスト&レポート

読解した英文でまとめのレポートを書かせ、そのレポートの日本語を使って英作プリントを作成してそれをまた授業で使うという試みは前年度にも実施している。その実践の一端を山田(2015b)で紹介したが、さらにその元になっている原実践は寺島隆吉氏が定時制高校で行ったものに遡る。寺島氏はこのとき生徒に書かせた「英語と私」という作文の一部分を利用し、その日本語に記号付けして語順訳の空欄を埋めさせている。

## 6. 繰り返される強弱のリズム — 学生の反応を見て記号を修正

さてここからは実際の授業の様子を紹介する。開始時間定刻に出欠点呼をしたあとで、教師はまず前時までの話の内容を問答で確認する。例えば、「セミョーンは何を作るのが上手だったのか」とか「セミョーンは枝を集めて帰る途中でどんな音を聞いたのか」といったような簡単な質問である。それにもかかわらず、すぐには答えられない者もいる。1週間前の授業のことはもう頭に残っていないのだろう。そんなときは前回のプリントを出させてその訳を読ませたりする。いつもこんなふうに授業は始まる。

次に、教師は黒板をいっぱいを使って縦4列にフレーズ番号を書く。それからは、座席順に指名して答えを言わせてそれを教師が板書していく場合と学生が答えを直接に黒板に書きに来る場合があったが、後者のやり方を採ることが多かった。フレーズ訳はそれほど難しくはないのでほどなく黒板が埋まるが、足し算訳は未記入で残っていることがときどきあった。[この点については後に考察する。]

そうこうするうちに遅刻上限の20分になり再度、点呼をとる。20分を越えた遅刻はシラバスの規定により欠席扱いとなるのだ。[なお遅刻は3回(1時間目は5回)で欠席1回、欠席が6回になると失格となる。]このように開始時間と20分後の点呼を毎回つづけていると、遅刻する学生でも必ず20分以内には来るようになる。山田(2016)でも述べたように、時間の見通しをしめすことで学生の中に内部的秩序が形成されるのである。

板書されたフレーズ訳と足し算訳の確認とそれに対する若干の説明が終わると、リズムよみ練習が始まる。リズムよみの区切りはフレーズ番号と重なることが多いのだが、ときにはフレーズ2つ分になることもある。そうして確認した区切りには英文の途中に縦線を入れるように指示する。また連結を示す下線の上部には結合音をカタカナで書き込ませる。

ギ

ヒ ストウツド ウエイピング ヒズ フラッグ

・ □ □ ・ ・ □

<sup>1</sup>He (stood) <sup>2</sup>[waving] his flag]. ← 連結の結合音

彼は 立っていた 振りながら 自分の旗 ← 2つ分の区切り

教師自身も授業に行く前には必ずリズムよみ練習を一度はやっておく。今回の教材はかなり急いで作ったこともあり、この予習のときにリズム記号が一部分ですっぽり抜けていたページが3枚も見つかった。気づかずに教室に行っていたら板書訂正で無駄なエネルギーを費やすことになったろう。それはさておき、この予習は教師が口慣らしをするウォーミングアップであり、リズム記号の最終確認でもある。

ところが、テストに先立つコーラス・リーディングのときにリズムよみの強弱記号を修正することがときどき起きる。学生の舌が回らないのである。そんなときは英語としてはやや不自然になるかもしれないと思っても強の数を増やして読むようにしている。音声の練習の要諦は「繰り返される強弱のリズムの体得」であるからだ。例えば、下例では、engineerの第一アクセントを弱から強に変えた。

ジ エンジア ソー イト シャツ(ト) ザ レギュレイタ アンド リバースト スティーム

・ ○ ・ □ □ ・ □ ・ □ ・ ・ ・ ・ ・ □ ・ □

<sup>8</sup>The engineer (saw) it, <sup>9</sup>(shut) the regulator, <sup>10</sup>and (reversed) steam.

機関手 見た それ 閉じた 調整器の弁 そして 切り替えた 蒸気

## 7. 視写プリントは何のため？ — 「暗記」から「語順認識」への意識変革

本節では、授業の最後のおこなう課題である視写について説明する。これはその時間にフレーズ訳してリズムよみした英文を書き写す作業である。この作業用としてフレーズ訳単位の英語と日本語をセットで写していけるような罫線付きの視写用紙を用意している。つまり、1コマ90分の中で1頁分の英文を和訳、音読、書写しているのである。では、なぜこの視写をやるのかと言えば、英語学力に関して言えば、正確なアルファベットを書けるようにするためである。そんな簡単なこと、と思われるかもしれないが、これが意外と難しい。1カ所も間違いなく写せたら授業は終わりということになっているが、最初は癖字があったり写し間違いをしたりで1回目の点検では合格できる者は少数である。学生の声を少し拾ってみよう。

私は後期の視写プリントで n と u、n と r の見分けがつかないと何度も注意されてきました。しかし流れの中で早く書こうとするとやはり見づらくなってしまい、気をつけていても直されることが多くたいへんでした。

一番苦労したのは視写プリントで書き写すときに r と v が同じ文字に見えないように書くのに苦労しました。この経験を通して今では意識しなくても r や v をしっかり書けるようになったので力がついたと実感できました。

中学、高校と英語を書いてきて、なかなか直りませんでした。しかしこの講義で1枚、1枚意識して書くことで、癖字が少しずつ直ったと思いました。

学生が正確に英文字を書けるようにしようと苦闘している様子が目に浮かぶようである。この文を読んでもらえれば、私が正確な文字を書くことは意外と難しいといったことが理解していただけたのではないかと思う。本来は中学校で学んでいるはずの英文字が定着していないのは授業が会話などのオーラル重視になっているからであろう。彼らにとっては英会話ができることなどより正確な英文字を書けることの方が、実は、はるかに重要だと私は考えている。〔その理由については山田(2015a)で論じたのでここでは触れない。〕

さてここで私の視写実践の歩みをふりかえってみたい。最初は英語の歌の歌詞をそのまま写させることから始まった。工業高校のときである。視写をしている間はいつも教室にしばしの静寂が訪れ私は安らかな気持ちになったことを思い出す。寺島メソッドの実践の中で私が最初に魅力を感じたのは、実を言うと、語義付き語順訳プリントでもリズムよみでもなく、この視写であった。これはただ紙を配るだけで教室が静かになるからである。しかもこの写すだけの作業にはちゃんと意味があった。寺島(1989:106-107)は「写す作業は一種の学習労働であり、人間が「手の労働」を通して脳を発達させてきた過程を教室で再現させたものである」(山田の要約)と述べている。

次に赴任した普通科高校では、この視写を教科書の英文でも実施した。写し方も日本語と共にフレーズ単位で書かせるように変わっていった。そして視写プリントを何枚も書かせて英文を覚えさせようとしていた。國弘正雄の提唱する「只管筆写」である。テスト前になると視写用紙を何枚も持ち帰って練習する生徒が次々と表れ、同僚の先生からも「平均点が上がった」「いつもできの悪い並べ換え問題がよくできている」などの驚きの声が上がっていた。〔当時の様子は山田(2005:202-211)に記載されている。〕

大学で教え始めてからもそれまでと同様な考え方で視写プリントを書かせていた。つまり英文を覚えさせるために何度も書かせていたのである。私の意識の中にはまだ「英語は暗記」という固定観念があったのだろう。しかし最近になってようやく暗記ではなく「語順を理解する」という見方が大切であると気づくようになり、覚えた英文をはき出す筆記試験ではなく、語順を意識して並べ換える「並べ換え筆記テスト」を考案することになった。その経緯は山田(2014:76-85)にまとめたが、そういった意識変革にもなって視写プリントの目的は変わり、先述のようにその目的は正確な文字を書けるようにすることになったのである。

## 8. 和訳が鍛える思考力、磨かれる日本語 — 「足し算訳」のヒントはどう出すか

さて前節までで大まかな授業の様子は理解していただけたと思うが、本節では第6節で保留になっていた「足し算訳」の問題を考えてみたい。まずどんなフレーズ訳が続く場合に足し算をするように指示しているかを以下に示す。

- |                            |                                    |
|----------------------------|------------------------------------|
| (1) ... he heard the clang | of iron striking iron, .... (No.2) |
| 彼がガンガンという音を聞いた             | 鉄が鉄を打ち付ける                          |

- (2) ... it was some one after the nuts which secure the rail. (No.3)  
それは止めネジを盗みに来た誰かであった (それは) レールを止めている
- (3) Semyon stood before the rail which had been torn up. (No.4)  
セミョーンはレールの前に立っていた (それは) 外されていた
- (4) And he had nothing with which to stop it, ... (同上)  
そして彼はゼロのものを持っていた それによって列車を止める
- (5) He ran as fast as the rail which had been pulled up; ... (No.6)  
彼はレールのところまで走った (それは) 上に外されていた
- (6) It seemed to him the train was already coming. (同上)  
(それは) 彼には思えた 列車がすでに近づいていた
- (7) He could not see the train or hear the noise. (No.8)  
彼は見るができなかった あるいはそのとどろきを聞く

第6節では「フレーズ訳はそれほど難しくはないのでほどなく黒板が埋まるが、足し算訳は未記入で残っていることがときどきあった。」と書いたが、その場合にどのようなヒントを与えて答えを誘導していたのかを見ていきたい。

- (1) 彼がガンガンという音を聞いた [鉄が鉄を打ち付ける] ← 記号づけ  
彼が[ ] \_\_\_\_\_ を聞いた。 ← 空欄で誘導
- (2) それは止めネジを盗みに来た誰かであった [(それは) レールを止めている]  
それは[ ] \_\_\_\_\_ を盗みに来た誰かであった。

次の(3)(4)(5)も同様のヒントを出した。これら5例の全てが「後置修飾→前置修飾」の変換である。この記号と空欄誘導を色チョークで書いてから答えを言わせていた。

- (6) (それは) 彼には思えた 列車がすでに近づいていた

この(6)についてはどんなヒントを出したのか覚えていない。いまじっくり考えても上手な説明は思いつかないのできつと「こうなるね」と言って訳を言ってしまったのではないかと思う。この it について辞書には「特殊な用法の動詞の主語として that 節を受けて; that 節を it に代えて主語に置き換えることはできない」(Cosmica 学研)、「非人称動詞 seem, appear, turn out などの主語として」(Wisdom 三省堂)と書かれている。どうもすっきりしない解説だが、it が仮主語ではないということは確かなようだ。

岸田ほか(2002: 25-27)には「it rained.の it と同じようなもので意味はない。英語では主語が表現されるという「主語+動詞」の型が圧力として働いたのと文頭に動詞があると主語と間違えられる可能性があることから it を形式的に文頭に置いた」との解説があった。しかし、こんなことを長々と説明してもよけいに頭が混乱するだけなので「it rained の it と同じで意味はない」とさらりとっておくのがいいかもしれない。

(7) 彼は見るができなかった あるいはそのとどろきを聞く (ことはできなかった)

これはいわゆる「分配読み」が必要な足し算訳である。寺島(1986:123)は数式  $a(b+c) = ab+ac$  を示してこの分配読みを説明しているが、それにならって以下のような板書を考えてみた。英語の時間に少し時間をとって次のような数学的演算の問答をしながら楽しむのも面白いかもしれない。

できなかつた (見る+聞く)  
=できなかつた・見る+できなかつた・聞く  
=見るができなかつた+聞くができなかつた  
=見ることも聞くこともできなかつた。

この文は学期末考査の和訳の問題の1つとして出題した。フレーズ訳&足し算訳ではなく一文として出題したのだが、次のような興味深い訳文があった。

He (could) not (see) the train or (hear) the noise.

彼は できた ない 見る 列車 あるいは 聞く その響き

- a. 彼は列車を見るができなかつた、あるいはその響きを聞くことも。
- b. 彼はその響きを聞くことも列車を見ることもできなかつた。

解答 a は左から右へ逆行せずにフレーズ訳しながら、同時に前からのつながりも考えて訳した名訳である。高度の「分配よみ」ならぬ「分配和訳」と言える。一方で解答 b は分配の起点である助動詞 could を意識するあまり「その響き」と「列車」の順番の不自然さに気づかなかつた、つまりそのことを考えなかつたのだ。このことからきちんとした和訳をすることはその人の思考力を鍛え、ひいては日本力を磨いていくことがわかる。[a の訳は、「彼は列車を見るができなかつた、またその響きを聞くことさえも。」とすればもっとよくなると思う。]

## 9. 日本語を文法的に理解する困難さ — 「センセンマル」の反復は見えるか?

さて次は、物語を読み終えたあとの読解レポート用に作成した「作文の手引き」について、さらには英作プリントについて述べていく。

第10 時間目の授業では、9 枚目のフレーズ訳を終えてから物語の全文を日本語で読んでいった。第1 回目の物語の読み聞かせ(部分的には輪読)は英文に入る手前まででやめていたが、今回は最後まで日本語で読んでいった。それからレポート用紙を配布して読解レポートを書かせた。

最初のクラスで用いた作文の手引きは以下に示すような簡素な(正しく言えば、お粗末な)手引きだったので、いくつかの面白い感想があつたものの、全体的には量的にも質的にもいまひとつという感じだつた。そこで次のクラス用には大西(1970)を参考にしながら、自分自身でも物語を読み直して新たな作文の手引きをこしらえた。

### 最初の手引き

あなたの印象に残った文を抜き出し、そこを選んだ理由を書き添えなさい。  
前半の日本語からは日本語で、後半の英文からは英文で抜き出すように。

### 改訂した手引き

〈問1〉セミョンとバシーリィが会話する場面が数カ所あります。そこから二人の性格やものの考え方、人生観などについて、どんな違い（あるいは共通点）があることが分かりますか。引用箇所を示しながら、その点について述べなさい。

〈問2〉線路番の仕事をしていたバシーリィは、モスクワへ起つ前までに、どんなことを経験しましたか。その出来事を順を追って書き出さなさい。

〈問3〉授業で和訳した英文の中であなたがいちばん印象に残ったところはどこですか。英語と日本語で抜き出して、そこを選んだ理由を書きなさい。

〈問4〉この物語のいちばん訴えたかったこと（＝主題）は何だと思えますか。自分自身の体験と重ね合わせて考えてみてください。

最初のクラスでは小さな A-5 用紙を使ったが、今回はたくさん書いてくれそうな気がしたので B-4 用紙を教室に持って行った。その予想は的中し B-4 用紙をびっしり埋めた読解レポートが何枚も出てきた。中には裏まで使って書いているものもいくつかあった。そのレポートをもとにして物語の主題について考えたいところだが、その前にその作文を元にしてどのように英作プリントを作ったのかを説明する。

まず最初に学生が印象に残った文（太字）として引用した箇所を掲げる。それからその下の枠に学生の作文をそのまま載せるのだが、英作問題としてはその日本語を教師が英語にしやすいように加工したものを使う。この「英語にしやすい日本語を作る作業」が英作文では最も難しい。だから、最初からこれを学生にさせるのではなく、教師がそのモデルを示すのである。そのモデル文にはさらに文構造を示す記号をつけられるのだが、その記号は語順並べ換えをするときに大いに活躍する。そうやって作成したプリントを以下に紹介する。

「**なにも運勢がおれたちの一生を台無しにするんじゃねえ。人間どもなんだ。**」

「**気短なんじゃねえ。おれは正しいことをいったり考えたりするだけのことよ。**」

① 今の私たちが生きているこの時代にもあてはまると思った。② 自分よりも地位の上の人や組織が正しくないことをしていても、下の身分の人が「おかしい、間違っている」と言っても相手にされないことがあるからだ。（田山奈美）

① このバシーリの言葉は [私たちが生きている] 現代に (もあてはまる)。  
These words of Vasily we live in of the present days are also true

②-1 [自分よりも地位が上の] 人や組織が ときには 正しくないことを (している)。  
whose position is higher than us The people and system sometimes the wrong do



## 10. 学生レポートから読む主題 — 新たなバシーリ像をとらえた形象読み

本節では学生の読解レポートを元にこの物語の主題について考えてみたい。当初、わたし自身の目はセミョーンの犠牲的行動にのみ注がれていた。列車を止めるために自らの腕を切りその血でハンカチを染めて旗をつくるという彼の身を賭した崇高な行為に強く心を打たれたからだ。学生の作文のなかにも「...and hung out his red flag. のところが印象に残った。... 自分の命をかけて他の人を救おうとするのはなかなかできることではない。深く切りすぎたことはそれだけ人を救おうとする気持ちが強かったのだ。」「...muttering, "God bless me!" He buried the knife in his left arm above the elbow. というところが印象に残った。セミョーンが自分の命を掛けてでも客車に乗った多くの人たちを守ろうという気持ちがここで一番強く感じられたからだ。」という声があった。

また一方で、最後の "Bind me. I tore up the rail!" を印象に残った英文にあげている学生もいた。彼はこの文を選んだ理由を次のように述べている。「... おそらくバシーリはセミョーンの行動に心を打たれたと思う。セミョーンが血染めの旗を落としそうになるまで行動できなかったのはバシーリの心の中で葛藤があったと思う。列車が止まって「私を縛ってくれ。私がレールを壊した。」と自白したとき彼はセミョーンに迷惑を掛け、多くの無関係な人を殺そうとした罪悪感と刑務所に入る覚悟の 2 つの感情を背負っていた。」この英文選定理由はバシーリの心理を読み取った見事な形象読みになっている。また別の男子学生は「主題は何か？」との問いに対して「バシーリのおこなった過ちをセミョーンがなんとかしようとして命をはり、その姿をみたバシーリが過ちに気づき罪を償おうと戻ってくる」と答えている。

いま紹介した 2 つの感想はバシーリの悔恨にも着目したものである。これは大西(1970)に出てくる「セミョーンの犠牲的行為によってバシーリの悔恨が導き出された」という主題よみの結論とも一致するものである。しかし大西はこの結論を「おきまりの結論」と評して満足せず、次のように述べている。「それはそれで主題として確認しておいて、ここではこの作品に形象されているセミョーンとバシーリという二人の対照的な人物像の方を細かく追求しておくほうが重視しようと考えていた。」

この後に大西の教室で起きたことは興味深い。香西という女生徒が「バシーリはこのとき、どうしてセミョーンの傍にいたんだろう」という疑問を出したのだ。途中経過を端折って結論を先に言うと、線路は 20 メートルの高さの土手にあるのだから、バシーリがそこを走り下って逃げて行って森の中にいたのならば、セミョーンの決死の行為をはっきりと見ることはできなかったはずだ、だからバシーリは捕まる危険と覚悟をしてセミョーンの姿がよく見える位置まですでに引き返していたのではないか、ということはバシーリはセミョーンが身を賭した行動を起こす前に後悔し始めて戻ってきていたのではないか、ということが生徒たちの議論の中で明らかになってきたのである。

大西は生徒の議論を聞いていて、セミョーンに「やめにしろよ、ステパーニッチ。おいら悪いことあ言わねえ、そっとしとくが身のためだぜ。」と言われたときに「何が身のためだ！ そっとしとくが身のためだぐれえ、おれだって百も承知だ。お前は運勢のことを言ってたっけが、今になってみりゃなるほど思い当たらあ。みすみす身のためにやならないと知りながら、正義のためにや、兄弟、やっぱり一步もひけねえものなあ。」と答えたその言葉の中にバシーリの人間性を垣間見るのである。さらに大西は、モスクワへ出かけ



る前の「あばよ、イバーヌイッチ。訴えが聞き届けてもらえるかどうか、わかんないけどなあ」という捨て台詞の絶望的な調子の中にも〈自分一個の利益はもう問題にしていないバシーリの決意〉を読みとるのである。

香西という生徒の発言をきっかけとしたクラス討議で大西はバシーリを「セミヨンとは違った意味で自己を正義のために犠牲にする決意を持っていた」と捉える新たな形象読みを手にしたのであるが、私の場合もひとりの学生の作文からこの見方と相通じるところがあるバシーリ像を知ることができた。以下にその作文を紹介する。

今この世の中は権力とお金を持っている上の人があることだけを考えている独裁状態になっている。その世の中を変えようとする者と逆らわずに流れのまま生きる者がいるが、人はどっちの道を選ぶことが正しいのかということが主題だと思いました。

自分は中学生のときに反抗期のまっただなかで、自分の考えが正しいと思っており、親や学校の先生など上の人にかみついていたときがありましたが、いま思えば、自分が間違っていたと思いますが、後悔はしていない。自分が違うと思ったことに疑問をもち意見を言うことは大切なことだと思うので。これからはバシーリのような勇気を持ち人の意見に流されることなく生きていこうと思いました。

大西のクラスの生徒たちは作品のリアリティを論理的に追求する中でバシーリの新たな人物像を見つけ出したのであるが、この作文を書いた男子学生は自分自身の体験から直観的、感覚的にそれを見つけ出したと言えるだろう。今回の授業では5つの学生エッセイを英作プリントの問題として採用したが、彼の作文もそのひとつになった。

## 11. まとめにかえて — 「アクティブ・ラーニング」と「グローバル人材」

本論のまとめとして最後に「アクティブ・ラーニング」と「グローバル人材」という2つの観点からこの授業のありようを考えてみたい。

まず最初に「アクティブ・ラーニング」から始めるが、そもそもこの言葉が使われ出したのは2012年8月の中教審（文部省中央教育審議会）の答申であった。それは大学教育における、学生の「受動的な受講」から「能動的な学修」への質的転換を提起する言葉として登場したのである。しかしこの学習方法は中教審が提起するずっと以前から教育現場では行われてきている。一方的な知識伝達型だけで教えていたら授業がうまく行かないことは小中高の教師なら誰でも知っているからだ。私が追実践している寺島メソッドにおいてはすでに40年以上も前から学習者主体の授業設計によりアクティブな学習者を育てている。

寺島メソッドの大きな特長として授業に「丸暗記」というものがないことが挙げられる。単語や熟語、発音を覚えるのではなく、和訳の方法、英訳のしかた、音読の方法を学ぶことをめざしている。暗記したものは使わないと忘れるが、学び方はいったん理解すれば頭に残るからだ。これは日常生活で英語を使うことがほとんどない日本の言語環境に適合した学習方法である。今回の授業アンケートでも「英語の文の組み立て方がわかった」「リズムよみですらすら読めるようになった」という声がたくさん出てきている。

また寺島メソッドには、学校教育は学び方の基礎を教え、将来も自力で学び続けていく

動機を与えるものだというコンセプトもある。今回のレポートにはこんな感想があった。

「特に後期の「信号」というやつはとても面白かった。個人的に本を買って読んでもいいと思うくらいになった。」 教室を出た後でも学び続けたい気持ちになるのだ。

教材の中身について言えば、寺島メソッドは「感動」を呼ぶ教材を選択することを提起している。この授業の最終レポートには「訳が楽しみだった」「物語に入り込むことができた」「最後は感動することができた」という声がいくつも出てきている。この知的興奮が、毎時間与えられる「和訳、音読、視写」という反復(これは語学学習には欠かせない練習なのだが)に生気を与え、学習者のやる気が継続していくのである。まだまだいくつもの能動的な変化を書き出すことができるが、紙幅も尽きてきたので次のテーマである「グローバル人材」の方に移りたい。

次にふたつ目の観点である「グローバル人材」という観点からこの授業を見てみる。実は今回わたしは不思議なことに気づいた。英語の教材群には地域的偏在があるとことだ。いや、新たな地域的偏在に気づいたと言ったほうが正確だ。というのは、山田(2014)において、英語教材にはユダヤ人受難の英文はあってもパレスチナ人迫害の英文は目にしないという偏在を指摘していたからだ。今回気づいた偏在はロシア語がもとになっている英文教材がほとんどないのではないかということだ。私はもう 40 年近く教えているが、思い出せるのはロシア民話「大きなかぶ」ぐらいである。

授業のときにわたしは「この話は 19 世紀ロシアの作家ガルシンが書いたんだが、イギリス人やアメリカ人も感動して英訳し、その後にも日本人も感動して日本語に翻訳したんだね。ロシア人もアメリカ人も日本人も胸にじんときるところはいっしょなんだね」と話したのだが、このときはまだいま述べた教材の地域的偏在のことには思い至らなかった。それに気づいたのは寺島(2015: 28-29)に次のような記述を見つけたからだ。

しかし「国際化」とは「国と国の垣根を越えてヒトやモノが自由に交流すること」を指すのだとすれば、それが「英語人」「米語人」との交流や「英語」「米語」という言語商品の流通だけに収まるはずはありません。

その証拠に、最近では空港の国際線だけではなく岐阜市のような田舎町のデパートでも中国語・スペイン語・韓国朝鮮語などの表示が見られるようになりました。それどころか東海北陸自動車道を走っていたら富山県城端<sup>じょうはな</sup>サービスエリアではロシア語の観光案内まであって驚かされました。

考えてみれば日本海のすぐ向こう側にロシアがあり、石川県の金沢港や富山県の伏木港にロシアの貿易船が出入りしているのですから、これは当然のことです。

「国際化」とはまさにこのようなことをさすのではないのでしょうか。ロシア語の観光案内で私が驚かされたのは「英語」で洗脳されていたからではなかったか。

この後に寺島は、いま多くの大学で「国際化」という名目で共通科目の必修科目から英語以外の外国語が一掃され、大学の授業までも英語でおこなおうとする「英語一極化」の動きが強まっていると述べているが、英語教材の出典においてはずっと以前から「英米一極化」「ロシア排除」が始まっていたのかのしれない。(註5) そういう意味においては、今回ガルシンの作品を読んだことは本当の意味での「グローバル人材」(「人材」ではな

くて「人間」なのだが)の育成に、わずかではあるが、貢献したと言えるかもしれない。  
(2016/3/18)

## NOTES

1. 本論をまとめているときにわかったことであるが、下記のサイトでは、PDF だけでなく文字データも取れる。右端にある「Full Text」から入れればよい。

<https://archive.org/details/signalotherstori00gars>

2. このサイトで実際にロシア語の「信号」を見てみたが、疑問符と感嘆符を除いては何もわからない。不思議な文字がページいっぱいに広がっているという感じである。英語を初めて目にする学習者が英文を見たときもこんなふうに英文が見えるのだろうか。英語教師の中には、寺島メソッドで作成されたプリントを見て、単語の意味を全てにつける必要はないとか、英文に記号がついているとごちゃごちゃしてかえって見にくいという人がいるが、それはその人が英語がわかるからそう思える（あるいは見える）のであろう。山田(2014)を読んだ以前の同僚教師から「この本を読んで山田さんがどうしてあんな面倒くさいことをやっていたのかやっとわかったわ」という感想をもらったが、英語教師は理性の目をこらしてはじめて英文に付された語義や記号の意味がわかってくるのかもしれない。

3. 読ませたい英文が長すぎて与えられている時間で読み切ることができない場合は、一部分を切り取って教材として使うことを考えると教材選択の幅が大きく広がる。[もちろん英語で読まないところは日本語で与えておく。] 2015 年度は、別の授業であるが、前後期とも太宰「走れメロス」の英訳を教材に採用した。後半部分を2カ所を(もちろん一続きで)切り取って音読を中心に据えた授業を実施したが、学生からはとても好評だった。「ここまで真剣に「走れメロス」を読んだのは初めてです。そしてこの後半部分を読んだとき、愛と信実と友情という言葉はいいなと思いました。」「国語の時間などに読んでいましたが、英語では大学ではじめて読みました。(中略)英語の場合はその中身の中身を読むような感じでした。」といった感想が寄せられている。

4. 並べ換え英作問題の一部では記号づけされた日本文の下に英語の語順に並んでいる記号づけ空欄を設けた。学生は記号をたよりにしてまず日本語で空欄を埋めてから英語を書くのであるが、この日本語での穴埋め作業の段階で苦勞するものが少なからずいる。上下で同じ記号の一対一対応ができれば簡単に穴埋めできるはずなのだが、それができないのは、第7節で言及した英文を正確に写せないことと同様に、これも「眼の力」(寺島 1989 : 32)がついていないことに起因するからだろう。

Vasily            the rail            broke            before            in Moscow            to the ministry            for appeal            went  
バシーリは [レールを (壊す) ] 前に [[モスクワにある] 本省に ] 訴えに (行った)。  
\_\_\_\_\_ ( ) \_\_\_\_\_ [ \_\_\_\_\_ [ \_\_\_\_\_ ] ] \_\_\_\_\_ [ \_\_\_\_\_ ( ) \_\_\_\_\_ ]

5. 本論で「ロシア排除」がずっと前から始まっていたのではないかと述べたが、この点に関して寺島(2015: 204)には以下のような興味深い記述がある。

しかし私がこの小説(=松本清張『小説 東京帝国大学』)で衝撃を受けたのは、明治の当時は、ロシア語やフランス語を通じて西洋思想がどんどん紹介され、当時はマルキストよりもアナキスト(無政府主義者)のほうが精力的に活動していたという事実だった。今と違って英語一辺倒ではなかったのだ。

なお、エレナ・バイビコフ(2008)は明治以降のロシア文学の翻訳状況についての歴史の変遷を明らかにしたものであるが、その中で、本論で取り上げたガルシンを含めた何人ものロシア人作家の名を挙げて、明治中期から大正期に至るまでの翻訳には重訳(ロシア語からでない翻訳)が少なくなかったと述べている。ということは小沼訳は重訳だった可能性が高い。また同論文には太田(1959: 12)を引用して「1908年にはロシア語から翻訳された作品数は英語からの翻訳を超えた。」との記述があり、上記の寺島の指摘を裏付けるものとなっている。

## REFERENCES

- エレナ・バイビコフ(2008)「日本におけるロシア文学の翻訳」『コンタクト・ゾーン =Contact zone』 vol. 2 pp.164-170
- 岸田隆之・早坂信・奥村直史(2002)『歴史から読み解く英語の謎』教育出版
- 太田三郎(1959)『翻訳文学』岩波書店
- 大西忠治(1970)『国語授業と集団の指導』明治図書
- 寺島隆吉(1986)『英語にとって学力とは何か』三友社出版
- 寺島隆吉(1989)『英語にとって授業とは何か』三友社出版
- 寺島隆吉(2015)『英語で大学が亡びるとき』明石書店
- 山田昇司(2005)『授業は発見だ』あすなろ社
- 山田昇司(2014)『英語教育が甦えるとき』明石書店
- 山田昇司(2015a)「「豊かなコミュニケーション力」として活用できる基礎力とは何か」  
大学英語教育学会・中部支部大会「実践報告」(2015/6/20)
- 山田昇司(2015b)「私的英語史から考察する協同学習」中部地区英語教育学会・和歌山大会「自由研究発表」(2015/6/28)

## URLS

- 山田昇司(2016)「「寺島メソッド」は教室にどんな変化をもたらすか—無記名アンケートの分析的解明—」「寺島メソッド」同好会 <http://kigouken.jimdo.com/>